

ばあちゃん

たからもの

須藤克三・文

久米宏一・画



執筆者紹介

須藤克三（すとう かつぞう）

1906年、山形県南陽市宮内に生まれる。山形師範、日大高師部卒業。山形県と東京とで小学校の教員ののち、教育雑誌編集、出版社勤務。戦災で郷里に帰り、山形新聞論説委員。教育・文化運動にとりくむ。山形県児童文化研究会、山形童話の会、山形県芸術文化会議等を結成。第12回久留島武彦文化賞受賞。

作品に『出かせぎ村のゾロ』（理論社）、『やまんば』（岩崎書店）、『出かせぎカラス』（童心社）等多数。

1982年没。

久米宏一（くめ こういち）

1917年、東京都に生まれる。「版の会」・童画グループ「車」同人。日本美術会・児童出版美術家連盟会員。さし絵・絵本の仕事に精力的にとりくむ。

さし絵に『山が泣いてる』『宿題ひきうけ株式会社』（共に理論社）、『カッコウのなく山』（岩崎書店）、『オイノコは夜明けにほえる』（童心社）。絵本に『やまんば』（小学館絵画賞受賞＝岩崎書店）、『出かせぎカラス』（童心社）等の他、詩画集『下町抒情』（童心社）、画集『朝市・こども・恐山』（すばる書房）がある。

幼年創作シリーズ ●ばあちゃんのたからもの

須藤克三●文 久米宏一●画

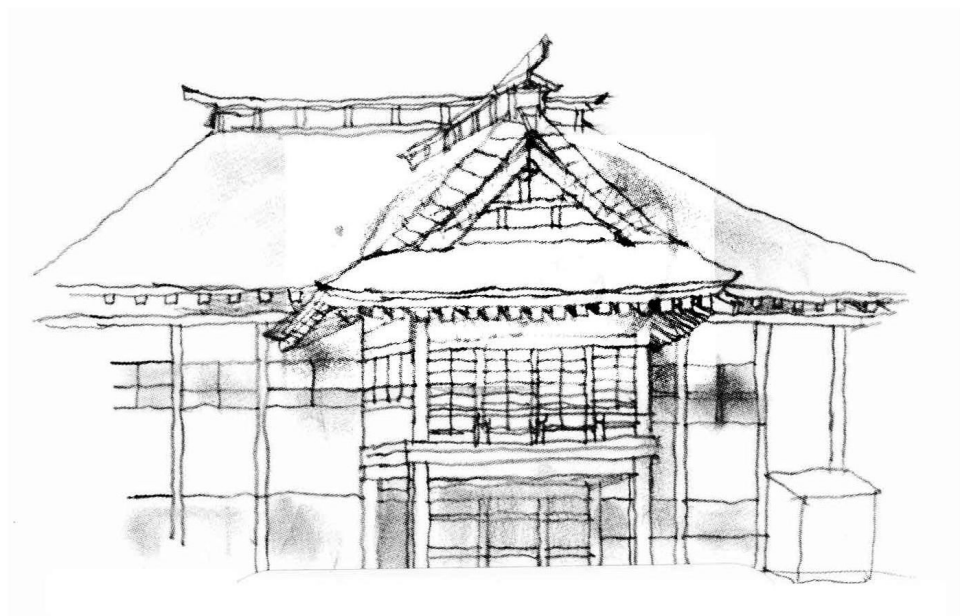
1983年12月1日第1刷発行

発行所●株式会社童心社 東京都新宿区三栄町22 TEL・03(357)4181

写真植字・製版・印刷●新興印刷製本株式会社 製本●株式会社難波製本

ばあちゃんのたからもの

須藤克三●文 久米宏一●画



童心社



古木
kume

● もくじ

太一たいいちのばあちゃん、日本にほんいち一

5

お花見はなみのけんか

33

おはよう、ツツジさん

61

アンズきの木したの下で

77

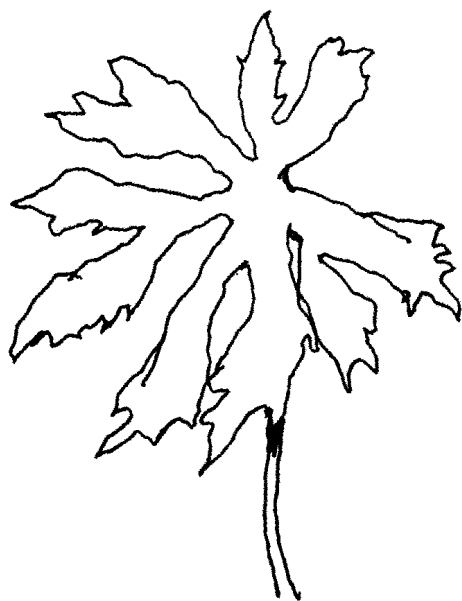
ばあちゃんのたなばた

97

解説かいせつ
|| 鈴木実すずきみのる

112

太^た一^{いち}のばあちゃん、
日^に本^{ほん}一^{いち}



太一^{たいいち}が まだ小さい^{ちい}ころ、よその家^{いえ}に あそびに
いくと、そのの じいさまか ばあさまが、

「日本^{にほん}一^{いち}の おまつばあさまの まごか、よくにて
ること。」

「日本^{にほん}一^{いち}の ばあさまの まごなら、世界^{せかい}一^{いち}になれ
よ。」

と、よく いうのであった。

でも、太一^{たいいち}には、日本^{にほん}一^{いち}なんて、なんのことか
わからない。

みんな、日本^{にほん}一^{いち} 日本^{にほん}一^{いち}というから、ばあちゃん
のことを、そういうんだなと おもって、

「うん、日本^{にほん}一^{いち}の まごだい。」

と　いって、わらわれていた。

ももたろうの絵本^{えほん}に、おにたいじに　いくときの
旗^{はた}に「日本一^{にほんいち}」と　かいてあると、とうちゃんに
おしえられた。

ばあちゃんが　やったんじゃないから、ばあちゃ
んの　日本一は、ももたろうと　ちがう日本一で、
日本一なんて、どこにも　あるもんだなと　おもっ
ていた。

でも、とうちゃんや　かあちゃんを　日本一と
いわないで、なんで、ばあちゃんだけ　日本一なん
だろう。

ばあちゃんに　きいてみたら、



「いいたいことを、いわせておけばいい。」

と いった、なんにも おしえてくれない。

とうちゃんに きいても、かあちゃんに きいても、

「ばあちゃんは、ほんとに 日本一だ。」

と いうだけ。

なんだって いいや。とにかく、うちの ばあち

ゃんは 日本一なんだ。

太一^{たいいち}は、あまり 気^きにかけないことにした。

四年生^{ねんせい}になったら、村^{むら}で たったひとりの おい

しやさまの むすこの 玄一^{げんいち}と つくえを ならべ

させられた。

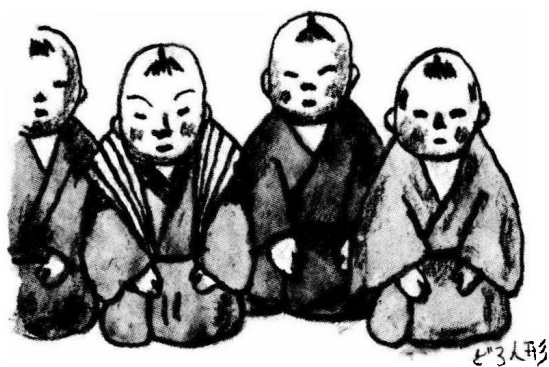
玄一げんいちは、とてもなまいきで、だれかれかまわず、
からかったり、わるふざけをする。

英えいちゃんのことを カッパ子こ、泰たいちゃんを カラ
ステング、東一とういちくんを ニシンアカメと あだ名なを
つける。

いくら わるくちいわれても、からかわれても、
おいしやさまの むすこだから、だれも だまっ
た。

太一たいちと つくえを ならべたとき、

「おい、太一、おまえの家いえは、日本一にほんいち小さい小こ屋やっ
こだから、日本一と いうんだぞ。」
と、いった。



くやしいけれど、太一は だまっていた。

ほんとに、太一の家は 小屋っこみたいに 小さいんだ。

となりの 地主じぬしのだんなの家のものおきより、牛うし小屋こやより 小さい。

村むらいちばん 小さいかもしれない。

玄一のやつ、にくらしいこと いうけど、ほんとだから しかたがない。

太一は、くやしくて くやしくて、なみだがでてきた。

学校がっこうから かえると、太一は、いきなり、
「ばあちゃん、玄一め、おらの家が、日本一小さく

て 小屋^{こや}っこみてえだから 日本^{にほん}一つていうんだ
というんだ。

おらあ、くやしく、ひっぱたいてやりてえが、ば
あちゃんが、いつも けんかするなよ、けんかとい
うものは、一生^{いっしょう}に一ど、生きるか 死ぬ^{しぬ}かるとき
するもんだというから、おらあ、がまんしてきた。」
と、なみだごえで、ばあちゃんに いった。

「そうか そうか。玄^{げん}ちゃんの いうとおり、おら
えの家^{いえ}は、日本一^{ちひ}小さいかもしれねえな。

だけど なあ、太一^{たいいち}、人^{ひと}というものは、家が大き
いの 小さいので きまるもんじゃねえぞ。そんな
ことを 気^きにかけるのは、小さい人間^{にんげん} というもん

だ。大きな人間になれ。」

太一は、ばあちゃんが、いっころへいきなので、ひょうしぬけしてしまった。

大きな人間って、どんな人間かな？

きょねん、ちほうじゅんぎよう地方巡業とかで、とうきよう東京から おすも

うさんが たくさん きたっけ。しょうがっこう小学校のにわに

小屋がけして、すもうをとったが、みんな でっかかったな。あんな大きな人間、み見たことがない。

ばあちゃんに、いくら 大きな人間になれ なんて いわれたって、とても おすもうさんみてえには なれないな。

太一は、すもうとりのことなど おもいだしてい



Hume

